

## 「重重プロジェクト」5年間の軌跡

アンセホン  
安世鴻写真展「重重 消せない痕跡Ⅱ アジアの日本軍性奴隷被害女性たち」

会期：2017年9月30日(土)ー10月9日(月・祝)

会場：東京・神楽坂セッションハウス 2F ガーデン

浮葉 正親

### はじめに

名古屋在住の写真家・安世鴻さんと初めて会ったのは2011年の秋である。安さんが「海巫 韓国の豊漁祭」や「魂巫 靈魂を呼び寄せる躍動」という写真展を大阪や東京のギャラリーで開催していることを知ったのは、不覚にもインターネットのサイト(<http://ahnsehong.com>)を通してであった。そのサイトに記された電話番号(現在は削除されている)に連絡をとると、栄のYWCAで講演会を開催するので来て欲しいとのことであった。その講演会は中国に残された日本軍「慰安婦」被害女性たちをテーマにするものであり、安さんの「重重プロジェクト」が本格的に始動することを告げるものであった。

「重重」とは、「慰安婦」にされたハルモニ(高齢の女性を指す韓国語)たちの顔に刻まれた深い皺と、心に積み重なった苦痛の重さを指す言葉であるという。韓国では、個人の力ではどうすることもできない運命に翻弄され、苛まれ、苦しむなかで醸成された否定的な感情を「恨」という。「恨」は岩の塊や布の結び目のように流れを遮るものであり、それが積み重なることで、さまざまな災いを本人や周囲の人たちにもたらすと考えられている。その「恨」を解き、人々の感情の流れをあるべき状態に戻すのがムーダンと呼ばれる宗教的職能者である。つまり「重重」というコンセプトは、安さんが韓国の巫俗(シャーマニズム)を題材とする写真を撮ってきたことと無関係ではないのである。

その翌年、新宿と大阪のニコンサロンで開催されるはずの写真展が一部のネット右翼の抗議で中止となった(新宿の写真展は、安さんの仮処分申請が裁判所に認められて開催されたものの、入場者の荷物検査や会場内でのメディア取材禁止、図録の販売禁止など、通常の写真展では考えられない異様な状況であった)事件は海外のメディアでも報道され、安さんは一躍「時の人」となった。安さん

の活動を支える人の輪も広がり、東京や大阪、札幌などで写真展が開催された。その後、安さんのハルモニたちを訪ねる活動は韓国や中国だけでなく、フィリピンやインドネシア、東チモールにも広がり、2015年に同じギャラリーで開催された同名の写真展の第二弾が今回の写真展なのである(写真1)。



写真1  
会場入口の案内板

### オープニングの巫俗儀礼

今回の写真展初日の夕刻、オープニングセレモニーとして、韓国から来た万神(ソウル地方の女性ムーダンの呼称)によるクツ(巫儀)が行われた。安さんをよく知るK万神が楽土と若い弟子をともない、韓国から駆けつけた。白い韓服に身を包み、麻布を頭に巻いたK万神は、折り畳まれた白い布の上に米を入れた真鍮製の器を置き、それを両手で持ちながら、ギャラリーの壁面に掲げられたすべての写真の前をゆっくりと通り過ぎた(写真2)。まるでハルモニたちの心の声に耳にじっと傾けているようだった。やがてギャラリーの中央で床に腰を降ろし、煙草を一服ふかした。すでに死んだハルモニたちの霊が降りてきているようだ。やれやれという表情でゆっくりと足袋を履き、クツを始めた。観衆は30名余りで、写真展の準備

を手伝ったスタッフとその友人知人がほとんどである。韓国語のわかる人は数名なので、万神の神託は適宜日本語に訳されて伝えられた。

K万神は黄海道クツの伝承者(国家重要無形文化財「黄海道平山ソノルム・クツ」履修者)である。この日行われたのは、死者の魂をあの世界に送るキルカルム(道を分かつ)クツである。折り畳まれた白い布を広げ、その一方の端を弟子の万神がしっかりと持ち、もう一方の端を韓国人の男子留学生が持つ。その布は死者があの世界に向かう道であり、ノゾットン路資金が並べられる。日本語に訳せば、三途の川の渡し銭だろうか。大部分の観衆はとまどいながらも千円札をその上に並べた。K万神はその布の真ん中を切り裂きながらゆっくりと進んでいく(写真3)が、苦悶の表情を浮かべ、ときに昏倒してしまう。死者たちがあの世界に向かう旅路の困難が表されているのだと思われる。歌と祈りの力でようやく布がすべて切り裂かれ、その布を身体に巻きつけたK万神は再びすべての写真を手で抱くようにしてギャラリーを一周した。その後、安さんに韓国でもまたクツをするように、そしてこの活動をさらに3年間は続けなくてはならないという神託を観衆の前でくださった。その後、安さんだけをギャラリーの外に連れ出し、かなりの時間神託が伝えられたようだが、その内容は公開されなかった。

### モノクロ写真からカラー写真へ

2012年に日本や韓国で開催された「重重 中国に残された朝鮮人元日本軍「慰安婦」の女性たち」展を終えた「重重プロジェクト」の活動は、翌年安さんがフィリピンで取材を開始してから、被写体がアジアの被害女性たちに拡大していく。2013年12月に東京練馬のギャラリー古藤で開

催された「重重 消すことのできない痕跡」で公開されたフィリピン女性のカラー写真は、それまでモノクロの静謐な雰囲気<sup>ハン</sup>で被害女性の「恨」を表現してきた安さんの表現世界を大きく変えるきっかけになったようである。

その写真展では、中国や韓国で撮影された写真はモノクロのまま展示されたが、2014年11月に名古屋市大須のギャラリー・ブシュケで開催された「重重 消せない痕跡 アジアの日本軍性奴隷被害女性たち」展では、インドネシアや東チモールの女性たちだけでなく、新たに撮影された中国人女性や中国の朝鮮人女性もカラー写真で展示された。安さんによれば、東南アジアの女性たちの表情やその空気を伝えるためにはどうしても色が必要だったという。その写真展の前に、安さんから同じ写真をカラーとモノクロでプリントした写真を見せてもらったことがある。彼女たちは東アジアの女性に比べて目が大きく、褐色の肌をしている。その顔に刻まれた深い皺をモノクロでプリントすると、憤怒の表情が強くなりすぎるように感じられた。過去の写真展でも展示されたイ・スダンさんの新しい写真は、痴呆をわずらう彼女が赤ん坊の人形をわが子だと思い、愛おしそうに抱きしめるものである。カラーの方が母親としての柔らかな表情がよく伝わるように感じられた。

なお、この写真展から安さんは「慰安婦」という言葉を「性奴隷」という言葉に換えている。女性たちを制度的に「慰安婦」にしたのは朝鮮や台湾の女性たちであり、それ以外の国では日本軍が侵略した地域の女性たちを無理やり性奴隷にしていることから、「性奴隷」という呼称を使うことにしたのだという。安さんの活動は、日韓の「慰安婦問題」というナショナリズムがぶつかり合う場を超え、戦争と女性の人権というよりグローバルな課題に移行しているといえるだろう。



写真2 K万神と楽士がクツを始める。



写真3 あの世界への道に見立てた白い布を切り裂きながら前に進むK万神



写真4 被害女性の証言映像を映すコーナー

### 証言記録と証言映像の重要性

今回の展示の図録には、23人の被害女性の証言が日韓英中の4カ国語でまとめられている。さらに会場にはプロジェクターが置かれ、彼女たちの証言映像がエンドレスで再生されていた(写真4)。これまでの展示では、写真のキャプションは名前と出身地、被害を受けた地域と年代というごく短いものだった。説明を読むのではなく、むしろじっくりと1枚1枚の写真に向き合ってほしいというのが安さんの願いだった。過去の「重重」展の被写体となった女性たちの声は、『重重 中国に残された朝鮮人日本軍「慰安婦」の物語』(大月書店、2013年)にまとめられている。今回の展示は、その後に収集された主に東南アジアでの被害女性たちの証言記録のまとめという側面もあったようである。安さんが現地に単身赴き、二重三重の通訳を使って集めた証言の映像記録は、被害女性たちが亡くなった後も残るだけでなく、専門家による後世の検証を受けることも可能である。

このような貴重な証言記録を発掘する作業を一人の写真家が独力で行っていることをわれわれはどのように考えるべきであろうか。しかも、今回の展示に至る過程はかつて安さんの写真展を中止し、その理由を明らかにしなかったニコソとの裁判と並行しているのである(2015年12月、安さんの勝訴で結審)。その渦中で中国や東南アジアに旅をする安さんを実質ひとりで支え続けた、妻の李史織さんの胸中いかばかりであろうかと、万神のクツを見ながら思いを巡らせた。

### おわりに

万神の神託を通訳していたのは他ならぬ李さんである。「あと3年はこの活動を続けなさい」という万神の声を聞いたときの李さんのこわばった表情を忘れることができない。ニコソサロンの中止事件で「有名になった」安さんには写真の仕事の依頼が途絶えた。子育てをしながら家計を支えるのは李さんである。クラウドファンディング等で集まった寄付は写真展の準備や海外への取材の経費ですぐになくなる。さらにニコソとの裁判の費用も捻出しなければならない。そして、写真展の図録の翻訳や証言映像の字幕作成など、手間のかかる作業が待っている。

安さんには申し訳ない言い方になるかもしれないが、「重重プロジェクト」を今の体制(実質上、夫婦二人)のまま続けるのは相当無理があるのではなかろうか。この5年間、その活動を通して訴え続けてきた安さんのメッセージを、「慰安婦問題」や女性の人権に関わる関係国の研究者が真摯に受け止め、連帯しながら、それぞれの立場で何らかの答えを模索する段階に来ているように思われる。これまで「表現の自由」をテーマにした安さんの活動のレビューは、この写真展の直前に刊行された、安世鴻・李春熙・岡本有佳編『《自粛社会》をのりこえる「慰安婦」写真展中止事件と「表現の自由」』(岩波ブックレット)および同編『誰が〈表現の自由〉を殺すのか ニコソサロン「慰安婦」写真展中止事件裁判の記録』(御茶ノ水書房)にまとめられている。

私は安さんの活動のもっとも重要なポイントは、彼が被害女性たちの生身の身体に向き合い、その声なき声や固く閉ざされた表情を引き出していることにあると考える。その貴重な記録が散逸し、埋もれてしまうことがないようにするために、一体何ができるのか。さまざまな専門家の知恵を集め、議論しなくてはならない。そんな思いを強くした今回の展示であった。